

# 送り仮名

学習日 月 日 ( )



☆ 送り仮名の正しいものを選び、( )に○をしましょう。  
また、その語を使った短文を  の中に書きましょう。

① ( ) 珍しい

( ) 珍しい

② ( ) 朗らか

( ) 朗か

③ ( ) 揺る

( ) 揺する

④ ( ) 熟る

( ) 熟れる

⑤ ( ) 潤おう

( ) 潤う

⑥ ( ) 和らぐ

( ) 和ぐ

☆ 漢字一字で表し、送り仮名を付けない名詞には、次のようなものがあります。( )に読み仮名を書きましょう。

( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )

嫁 鯨 鋼 蚕

( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )

芝 蛇 薪 滴

( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )

峰 岬 霧 翼

☆ 次の語は、活用のある語から転じた名詞で、送り仮名を付けないものです。( )に読み仮名を書きましょう。

( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )

煙 虞 (「恐れ」とも書きます。)

( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )

隣 畳 卸

( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )

趣 舞 寿

## ことばの知識

ものの数を数える単位には、さまざまなものがあります。次のものと、それを数える単位とを、線でつなぎましょう。

魚 ・ 一句

うさぎ ・ 一丁

うどん ・ 一尾

とうふ ・ 一棹さお

飯 ・ 一首

羊羹ようかん ・ 一羽

俳句 ・ 一玉

短歌 ・ 一膳

## 鳥取に生きた歌人 学習日 月 日( )

☆ 鳥取に生きた歌人「佐竹弥生」の短歌を紹介しします。好きな短歌を一首選び、それを視写したり、音読したりして、味わいましょう。

佐竹弥生は、昭和八年に気高郡（現在の鳥取市有富）に生まれました。三人の娘を育てながら、清らかな精神を保ち、この世に生きる不安や、内面からわき出る日々の感想を表現し続けました。昭和五十八年に亡くなるまで、三冊の歌集を出しました。

うつくしいころのままにありたしと一面の黄の野原を駆ける

佐竹 弥生 『合同歌集 青炎』

美しく、そして強く生きようとする決意を述べたようなこの短歌は、弥生が三十才のころの作品。このときの彼女はすでに結婚して子どもを授かっていたが、まるで少女のようだ。人生においてどんなことが起ころうとも透明なまでの清らかさを持ち続けた弥生の等身大の作品だといえよう。

降りてゆく泉の底ひ映りたる貌より汲みし一人の他者

佐竹 弥生 『雁の書』

たずねていった泉の底に、自分の顔が映っている。見ていると、その顔は自分ではなくまるで他人のように思えて、自分の中に新しい自分を発見したような気持ちがあった。自分の内面を深く見つめた短歌だ。

大夜空あてなく立てば遍在の案内のごとくとびたつ螢

佐竹 弥生 『天の螢』

秋に病みゆめさへ病みてしろじろとあかつき起きにつかふ齒楊枝

佐竹 弥生 『天の螢』

一首目では、夜の暗い空のあちこちへ飛んで消えていく螢を、まるでここではないどこかの世界への案内者のようだ、という。二首目。しばらく伏している、うとうととして、現実と夢の境目がなくなってしまうようだ。朝の起きがけに使う歯ブラシは、夢から現実にもどる手がかりとして存在するのだろう。どちらの歌も、はじめは自分の存在のはかなさに心揺れているように思われるが、読み進めると一転する。「螢」や「齒楊枝」といった実在のものをみずからの内面にしっかりと引き寄せ、言葉の世界を鮮やかに広げており、読んだ後に、彼女の強さを感じる。

祈りては冬の螢をはらむべくひたに病ひに深みゆくなり

佐竹 弥生 『なるはた』

身体を侵していく病がいえることを祈りつつ、まだ成虫にならない冬の螢を、体内の病もろとも深く抱きしめている姿を想像する。病んでもなお、歌の中に壮絶な美が息づいていて圧倒される。

引用 毎日新聞「天の螢①〜④」二〇〇九年七月〜十二月

(歌人 江戸 雪)

☆ 五首の短歌の中で好きなもの一つを選び、視写しましょう。

また、選んだ短歌の中で、特に好きな表現にサイドラインを引きましょう。

## 鳥取で詠まれた短歌を味わおう 学習日 月 日( )

☆ 鳥取を題材にした短歌を紹介します。好きなものを一首選び、それを視写したり、音読したりして、味わいましょう。

虫となり砂上にかぎろふしばらく われ眩けり「砂丘・鳥取」

くずはら たえこ  
葛原 妙子 『原牛』

砂の線つね崩れつつささやけりわがみぎひだりまたうしろにて

くずはら たえこ  
葛原 妙子 『原牛』

引用 葛原妙子全歌集  
(砂子屋書房)

くずはら たえこ  
葛原妙子は明治四十年に東京都に生まれました。新写実の世界を切り拓いた女流歌人の代表者の一人です。二首の短歌は、いずれも第五歌集『原牛』に収められたものです。

大山が紅葉のやまとなるころは海のさかなはいかにか跳ねお

こいけ ひかる  
小池 光 『山鳩集』

牛乳を四合も飲みて青年のごとくになりぬ山の牧場に

こいけ ひかる  
小池 光 『山鳩集』

引用 山鳩集(砂子屋書房)

こいけひかる  
小池光 歌人。宮城県出身。仙台文学館館長(平成十九年〜)  
鳥取を訪れたときの歌が、「鳥取秋天」として『山鳩集』(砂子屋書房 平成二十二年)に収められています。その中から二首紹介しました。

ラッキョウのおらさきの花咲くころに

と  
砂丘訪ひたし帽子かぶりて

くりき きょうこ  
栗木 京子

くりききょうこ  
栗木京子 歌人。愛知県出身。

『歌壇』(平成二十三年一月号)に収められた新春巻頭作品集十六首「ラッキョウの花」の中の一首です。

☆ 五首の短歌の中で好きなものを一つ選び、視写しましょう。  
また、選んだ短歌の中で、特に好きな表現にサイドラインを引きましょう。

古文の表現に慣れ、その特徴をつかんで読み味わいましょう。



「てふてふ」は、何と読むでしょうか？意味は「ちよう」のこ  
となので、声に出して読むときは「ちようちよ」と発音します。

古文に用いられている仮名遣いを「**歴史的仮名遣い**」と言います。  
古文を読み、仮名遣いに慣れていきましよう。

問題1 次の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直し、すべてひらが

なで書きましよう。

- ① こゑ ( )
- ② をかし ( )
- ③ 習ふ ( )
- ④ 笑はず ( )
- ⑤ 言ひけり ( )
- ⑥ 返すがへす ( )

長文で確認しておこう



問題2 例にならって、①～③の文中の歴史的仮名遣いに——線を引き、それを現代仮名遣いに直して、すべて平仮名で書きましよう。

例 雨など降るも、**をかし**。

① 春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎ  
は、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくた  
なびきたる。  
(枕草子から)

② つれづれなるままに、日暮らし、硯に向かひて、  
心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書  
きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

③ 沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。

(平家物語から)

問題3 ②は、鎌倉時代に書かれた随筆の冒頭部分です。

作者は兼好法師です。作品名を書きましよう。

作品名 ( )

確認しておこう



「係り結び」

係り結び

…あやしうこそものぐるほしけれ。

「あやしうこそ」の「こそ」は「あやしう」を強調しています。も

し、「こそ」が入らなかつたら、

…あやしうものぐるほしけり。となります。

「こそ」「ぞ」が用いられると、文末(結び)が変わるのが特徴です。

このような表現を「係り結び」といいます。



古文では、主語や格助詞を省略することがあります。古文の

意味を考えるときは、省略した語を補いながら読むといいでしょう。

○ をりふし北風激しくて、…

↓をりふし北風(が)激しくて、…

問題1 次の文の||線部に対する結びの部分に|線をつけましょう。

- ① 花ぞ散りける。
- ② さぬきのみやつことなむいける。
- ③ 尊くこそおはしけれ。

問題2 次の文章を読んで、後の問題に答えましょう。

与一、かぶらを取つてつがひ、よつぴいてひやうど放つ。小兵といふぢやう、一二束三伏、弓は強し、浦響くほど長鳴りして、あやまたず扇の要ぎは一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。かぶらは海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさつとぞ散つたりける。

(「平家物語」より)

(1) 歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して書きましょう。

(2) 係り結びが三カ所あります。確認しておこうを参考に

して、関係が分かるようにしるしを書きましょう。

歲月不待人。

この文は、漢字だけで書かれていて白文と言います。これでは、読めませんね。そこで、文として読めるように符

号や仮名をつけました。その文を訓読文と言います。

送り仮名は漢文の場合は、漢字の右下に片仮名で書かれた文字のこと。

返り点 漢字の左下に補います。

レ点・一・二点の他にもいくつかの返り点があります。

○レ点 すぐ下の字から帰って読む符号

(訓読文)

登ル山ニ

② 登ル山ニ (書き下し文) ① 山に登る。 ↑読む順番

○一・二点 二字以上を隔てて、上に返って読む符号。

① 故人 ② 西ノカタ ③ 辞ニ ④ 黄鶴 ⑤ 楼ヲ ⑥ ⑦

問題 次の漢文を読みたいと思います。例を参考にして、

左側に漢字を読む番号を書きましよう。

例 良薬ハ苦シク 口ニ

- 1 2 3 4

① 借ル虎ノ威ヲ

② 歲月不待人ヲ

③ 行百里者半九十ヲ

④ 百聞不如一見ニ

⑤ 不入虎穴不得虎子ヲ

漢詩は、七・九世紀のころ、中国(唐)の時代に、形式やリズムなどが整えられたといわれています。

絶句 ↓ 「起・承・転・結」の四行から成り立っている。

五言絶句(五字四句) 七言絶句(七字四句)

律詩 ↓ 二行ずつの四連、計八行からなる。

五言律詩(五字八句) 七言律詩(七字八句)

声に出して読もう ①

五言絶句

絶句 杜甫

江は碧にして鳥は逾よ白く

山は青くして花は然えんと欲す

今春 看す又過ぐ

何れの日か是れ帰る年ぞ

漢詩の押韻とは、韻をふむことです。

五言の場合は、偶数句の末字に押韻するのが原則です。

然 ↓ ネン

年 ↓ ネン

絶句 杜甫

江碧鳥逾白

山青花欲然

今春看又過

何日是帰年

問題1 次の漢詩を行ごとに( )に書き下し文にしましょう。

黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る 李白

故人西辞黄鶴楼

烟花三月下扬州

孤帆远影碧空尽

唯见长江天际流

問題2 この詩の形式を答えましょう。

問題3 押韻をまるで囲みましょう。